

鎌倉淡青会公開セミナー@鎌倉商工会議所

2018年 第4回 10月30日

演題：「鎌倉の石碑をめぐる」

講師：元第一生命・郷土史家 猪熊 紀彦

鎌倉の石碑の特徴

鎌倉市内に点在する石碑の数は凡そ百数十基を数えるものと思われ、そのうち半数ぐらい（78基）は「青年団のいしぶみ」と呼ばれるもので、戦前「在郷軍人会」「消防団」と並び称された「青年団（初期には青年会）が建立したものである。

青年団の石碑は「鎌倉史跡道標」という性格を持ち、それ以外の石碑は何らかの事件や行事にあわせて個々に建立された。

今回の石碑紹介はある程度歴史に沿った形でと考えて碑文を選んである。

1. 石渡新造サ衛門之碑

本覚寺の鐘楼の前にある石碑である。本覚寺は日出(にっしゅつ)が創建した日蓮宗の寺院である。石渡新造サ衛門は三浦郡宮田村で生まれ、長ずるに及んで日蓮宗の熱心な信徒になり、日出が折伏の旅に出る時は常に警護役として供をした。房総を旅しているときに木更津の八幡社泉蔵寺の別当と法論を戦わせてこれを打ち負かし、その証に梵鐘を寄進される。供の石渡新造サ衛門はそれがかついで鎌倉に持ち帰った。以上は石碑の裏や鎌倉風土記に書かれている。鐘は現在横浜県立歴史博物館に展示されている。

2. 建長寺佛殿唐門重修の記

建長寺の仏殿唐門の前に建てられた石碑である。石碑には、仏殿唐門は徳川第3将軍家光の弟の忠長が、生母崇源院夫人のために駿府に霊屋として立て、後に家光が建長寺に移築した。大正11年に古社寺保存法により特別保護建造物に指定され、その後関東大震災にあい大きな被害を受けたが、国庫の補助で修復が行われ大正15年に完了した、との記載がある。

現在の定説では、霊屋は増上寺に建てられ、20年後の立て替え時に建長寺に移築されたとされている。

3. 今宮（青年團の碑）

社殿の前の立て札には、祭神として、土御門天皇、後鳥羽天皇、順徳天皇の名前が書かれている。石碑には、延応元年(1239年)に鎌倉で大騒動が発生したのは、隠岐に流されそこで死んだ後鳥羽院の怨霊のためとし、それを鎮めるために今宮を建て、順徳院と承久の乱で戦った護持僧の長賢を合祀したと書かれているが、土御門天皇の名前はない。

当時は配流先で死ぬと怨霊となると信じられ、これをなだめるため臣下の場合には位をあげた。

太宰府で死んだ菅原道真是怨霊をなだめるため生前従二位右大臣だったのを正二位左大臣が贈られ、それでも収まらないため従一位太政大臣が贈られた。天皇の場合には徳がつく諡号が贈られた。後鳥羽上皇に対しては顕徳院という諡号が贈られたが、その後も異変が続くため、後鳥羽院に戻された。

4. 鎌倉山記

鎌倉山の由来が将門の乱から書かれており、昭和の始めに実業家の菅原通済が鎌倉山に道路を通し、住宅地(分譲別荘地)を作ったと書かれている。この石碑には石勝という石工の名前があるがめずらしい。菅原通済題の文字は字体が異なっており、刻み忘れたため、別の石工が刻んだと考えられる。近くのそばやの榎亭の本館は戸塚の豪農の猪熊家の旧宅を移築したものである。

5. 十一人塚(青年團の碑)

この碑は稲村ヶ崎にあり、昭和6年に建てられた時に中身が誤っているという声が出て、田邊松坡という先生に書き直してもらった。田邊松坡は逗子開成中学校校長と鎌倉女学院理事長を兼務していたがこの時に逗子開成のボート遭難事件が発生した。搜索費用等の発生費用はすべて田邊松坡が支払った。

この碑には、元弘3年(1333年)に鎌倉攻めの新田義貞軍の大將大館宗氏が極楽寺坂の切通しから鎌倉に攻め込んだが、北条方の本間山城左衛門手兵による本陣への切り込みを受け、大館宗氏主従11人が戦死した、と書かれている。

6. 新田公遺蹟陣鐘山之碑

この石碑は、元は稲村ヶ崎の山の上であり細い私道を通る必要があったが10年くらい前に1件の民家が立ち、その敷地内を通らないと行けなくなったが、民家の持ち主の費用で現在の地に移された。

この碑には、新田義貞が鎌倉の北条高時を攻めたときに姥ヶ懐(うばがふところ)に陣を敷き、近くの山頂に鐘を掛けて敵を牽制し、稲村ヶ崎から鎌倉に乱入し鎌倉幕府を滅ぼした。これによりこの山が陣鐘山と呼ばれるようになった。大正2年に辛亥革命時の将軍李烈鈞が山下に仮寓し、回天の密議をしていた。近くに別荘があった芹澤登一は、義貞公の遺跡が無くなることを恐れ、また李烈鈞の滞在を喜びその荘を陣鐘山義烈荘と名付け、これらを不朽にするため石碑を立てた、と書かれている。

7. 鎌倉宮碑

石碑には、明治6年に天皇は護良親王を祭る鎌倉宮に行幸した。皇居に戻り、三条実美に、国に殉じた護良親王を顕彰するため石に彫るように命じたと書かれている。しかし実際に石碑がたてられたのは大正10年であった。なぜ約50年も後になったのかは不明である。

大塔の宮の読み方は「だいののみや」でなく「おうのみや」が正しい。古来より高貴の人に対しては実名(じつみょう、諱)を使わず通常は通称(仮名)を使うことになっていた。実名は原則2文字で訓読みである。護良は実名のため読み方が「もりなが」か「もりよし」なのかよくわ

からなかった。広辞苑第1版では「もりなが」であったが最新の第7版では「もりよし」になっている。ただし鎌倉宮内では「もりなが」親王と呼ばれている。

大久保(一蔵)利通は一蔵が通称で利通が実名である。高杉晋作(春風)は晋作が通称で春風が実名である。坂本龍馬(直柔(なおなり))は龍馬が通称で直柔が実名である。明治5年に名前を一つにするようにとの通達が出た。西郷(吉之助)隆盛は吉之助が通称で隆永(たかなが)実名であったが、誤って父の実名の隆盛が役所に届けられた。

8. 鎌倉に紅葉を植る記

石碑は鎌倉宮の境内の入口近くにある。碑には、明治の実業家鹿島万兵衛が老後を鎌倉で過ごし、77歳の祝いのときに、鎌倉に紅葉が少ないことを惜しみ、鎌倉宮や鶴岡八幡宮に紅葉を植えさせたと書かれている。文と書は日蓮宗の学者であった田中智学である。

9. 立正安国論御勸由来聖筆副碑

日蓮宗の寺院である長谷の光則寺内にある石碑である。正嘉・正元の時代に大災害が発生した。日蓮は、世が正に背き悪に帰したためとし、忠諫の書として立正安国論にまとめ、文応元年に宿屋光則経由で北条時頼に提出した。光則寺はその跡であり、これを顕彰するため碑を建てた、と石碑には記されている。

10. 四条金吾邸址

長谷の収玄寺境内にある石碑である。碑の表面は東郷平八郎の書である。四条金吾は、諱(いみな)が頼基で北条一族の江間親時の家臣であり、日蓮聖人に帰依した。日本武士の典型、妙宗信者の良範として仰ぐ、と碑の裏面に書かれている。

11. 玉縄首塚由来

この石塚は昭和42年に建てられ、次のように書かれている。1526年(大永6年)、南総の武将里見義弘(実堯の誤り)が鎌倉に攻め込んだ。時の玉縄城主北条氏時(早雲の孫は誤りで子)は、大船の豪士甘粕氏、渡内の豪士福原氏らとこれを迎え撃ち、戸部川(柏尾川)付近で何回かの合戦をおこない、敵を潰走させた。この戦いで甘粕氏以下三十五人が戦死し、福原氏も傷を負い、里見勢も多くの死者を出した。戦い後、北条氏時は首級を交換し、これを埋葬し塚を築き、塔を建ててその霊を慰めた。これを玉縄首塚と呼んだ。

12. 松陰先生留跡碑

吉田松陰は、母方の叔父が住職をしていた瑞泉寺を何度か訪れた。この碑は瑞泉寺境内に昭和4年に建てられた。碑の裏面は徳富蘇峰の文と書である。

13. 天神山碑

山崎の天神山は道真を祭る村社があり年貢が免除され共有地として村人が管理していたが、明治の始めに御料林に編入された。村民は困惑したが、明治33年に宮内省より御料林を安く払い下

げる規定ができた。神社の総代が村長をしていたため、その指導のもとに、村民は艱難辛苦して購入費用を貯め、明治 40 年に天神山の土地を購入した。この事績を残すため碑が建てられた。

14. 天保九如

長谷にある浅間神社に登る途中にある石碑である。大正 4 年に大正天皇の即位の大典が行われるのを記念して長谷の有志 121 名によりその共有地 2 万余坪に松と桜を数万本植えて公園を作った。鎌倉は、名所旧跡は多いが公園が少ないという欠点があったが、人口が増え観光客も多くなるなかで、この公園ができたのは喜ばしい。有志者の誠意は大いに称すべきであり、松方侯爵から天保九如の題字を得て碑を建てた、と碑には書かれている。

15. 浅間神碑奉遷記念辞

長谷にある浅間神社にある石碑であり、次のように書かれている。浅間神碑は天保年間に創立され、もと大仏坂上にあった。近時に至り草木に没するようになったため、長谷の青年会が相談し多数の賛同を得て、共有地の一部を開拓して公園としてその中に浅間神碑を奉遷した。諸氏の労苦を多し神霊の守護が永久に続くことを期する。ここに由来を記し後世に伝える。

16. 高井真哉君碑

安養院の墓地前にある石碑で次のように書かれている。高井真哉は鎌倉町青年団の小町支部長の職にあったが、大正 12 年 9 月 1 日の関東大震災にあい、家屋の倒壊で圧死した。高井真哉は謹厳にして労役をいとわずよく青年の指導に尽くし衆人の畏敬の的であった。ここに碑を建てて永く記念とする。

17. 間島君旌徳碑

間島弟彦は鎌倉の公共施設に莫大な寄付をおこなった。弟彦は名古屋藩士間島冬道の 7 男として生まれ、明治 31 年三井銀行に入社、大正 7 年に取締役までなったが 12 年に病気で職を辞した。文芸を好む冬道は十五銀行の創立者であったが弟彦も和歌に長じ善く父の偉業を継いだ。鎌倉町は図書館建築の功労者として館側に弟彦の徳を記した石碑を建てた。

18. 諏訪神社板額

神社の社殿に掲げられている板額である。板額にはまず日露戦争の概要を書き、最後に、日露戦争に大勝利したのは国民が忠烈勇武を世界に発揮したためであり、その概要を記し、不朽に伝える、と書かれている。板に墨書きのため一部判読不能である。
